
天使の名前

ゆりかご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の名前

【Nコード】

N9303A

【作者名】

ゆりかご

【あらすじ】

精神病棟にいた名前も知らない彼女は、三秒の自由を手に入れるために飛び立った。僕の手の届かないところへと 「三秒の自由を手に入れて、その間に天使に逢うのよ」、そう言って。

つきんとした痛みが、彼女にふれた指先から伝わった。やがてそれはじわじわと軀全体に広がり、気付いたら、ぶるぶると震えていた。

涙をこぼしながら呟いたのは、人の名前だっただろうか。

彼女の、名前だったのだろうか。

狭苦しい軀から心が遊離して飛んでしまいそうなほどに、青い空。それが眼前に広がっている。

夏のくせにめずらしく雲のないその日、永遠の青を背景に、僕がアスマと呼んでいた彼女は立っていた。彼女の白いワンピースがばさばさと、やる気なさそうに風にあおられて音を立てている。

ビルの屋上、二十四階。貯水塔の上でぴんと背筋をのばした彼女は、製図用のコンパスのようでもきれいでもあり、また海原を泳ぎ回るイルカのように楽しそうでもあった。足下にはサンダルが、まるで子どものように脱ぎ散らかされていて、突風が吹けばころころと転がってしまいそうだった。サンダルも、彼女も。

「ハイ、ユウジ」

なんのために彼女がここにいるのか、それすら一瞬忘れてしまいそうなほどいつもどおりに、彼女は軽く手を上げて僕に向けて微笑んで見せた。

「アスマ、そろそろ診察の時間らしいけど、どこに行くんだい？」

屋上の入り口、ドアに軀をあずけて押さえ込みながら、僕もまた気楽にアスマに聞いてみた。後ろでは、なんとかして彼女を止めようとやっきになっている医者や彼女の両親が、どんとどんとドアを叩きまくっている。僕はその振動を、背中に心地よく聞いた。彼女は立ちっぱなしのまま、長い髪を指先で弄くっていた。

「天使に逢いに行くの」

短く答えて、アスマはふふふと楽しそうに笑った。そしていつものように、僕に講釈を垂れ始める。僕はそれを聞くのが、とても好きだった。

「ユウジはアレだから知らないだろうけどね、この高さから飛び降りるということは、地面に辿り着くまでに三秒はかかるということなのよ」

どうやらアスマは、数学とか物理にも長けているらしい。僕には落下速度の計算なんて、逆立ちしてもできない。大体、公式を知らない。

話をする度に新たな特技を見せる人だ。賢い女性なのだと思う。でも彼女は、それを補ってもお釣りが来るほどのクレイジーだった。「三秒の自由を手に入れて、その間に天使に逢うのよ」

要するに、壊れている女性だった。でもそう言ったときのあどけない表情は、まるで子どものもようでした。

だからだろうか、
「天使に逢ったら、僕もそのうち行ってくつて、言っておいてくれるかな」

そんなことを言ったのに、彼女はさしてびっくりした様子もなかった。むしろ当然のように後を続ける。それはあまりにもさりとられた言葉だったので、僕はその意味をじゅうぶんに噛み締めることができなかった。もしもそうできたら、僕は彼女を止めていただろうか。

「ユウジはわたしが迎えに来るから」

じゃあ、またね。永遠になるかもしれない別れの挨拶は、とてもあっさりしていた。毎日病室へ帰るそれと同じように、彼女は手を振って、三秒の自由を手に入れた。

元は競泳の選手だったというアスマは、かるく貯水塔のフタを蹴って夏の海原へダイブ。とても気持ちよさそうに長い髪を羽根のように広げて、天使に逢いに行った。

僕は映画のコマ落としのようにゆっくりと見えなくなるアスマの髪、腕、ワンピース、足を順番に見送りながら、思った。むしろ天使は彼女なのではないだろうか。そしてそう思ってから、それでアスマが僕を迎えに来るのだと、素直に理解した。

僕は笑った。ヒステリックに。アスマのようにクレイジーに。きつちり三秒間。

そして笑いを引つ込めた途端、頬が濡れていることに気付いた。どうやら泣いていたらしい。アスマが地上に辿り着くころだった。

幸せそうな、とても幸せそうな顔だった。血をきれいに洗い流して死に化粧まで施して、安置所に寝かされた彼女はいつになく幸せそうだった。きっと天使に逢ったんだろう。今もその辺で、僕を待っているかもしれない。

「アスマ……」

結局僕は、彼女に名前を覚えてもらえなかった。

一度だけしつこく聞いたことがある。彼女は笑って、講釈を垂れた。「名前なんてものは人類が考え出した最悪の弊害よ」と。

草原で遊ぶ馬になりなかつたと言っていたことを、不意に思い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9303a/>

天使の名前

2010年10月10日01時38分発行